

アメリカを探せ

青木富貴子



青木富貴子

アメリカを探せ

Daylight-

comes silent-

the stars fade

near the silent down

to 120 individual airport

so not to arrive in
darkness me on

burning less than

20 fold to gas at 1000 ft

We have found an on

Makapu. Keep with 10

to start round band

peppers
to the order

著者略歴

1948年東京生れ。成城大学経済学部卒業。出版社勤務を経て現在フリーランスのジャーナリスト。ノンフィクション作品に「ライカでグッドバイ・カメラマン沢田教一が撃たれた日」がある。

アメリカを探せ

1983年12月25日 第1刷

著者 青木富貴子

発行者 半藤一利

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町 3-23

電話 東京03(265)1211(代)

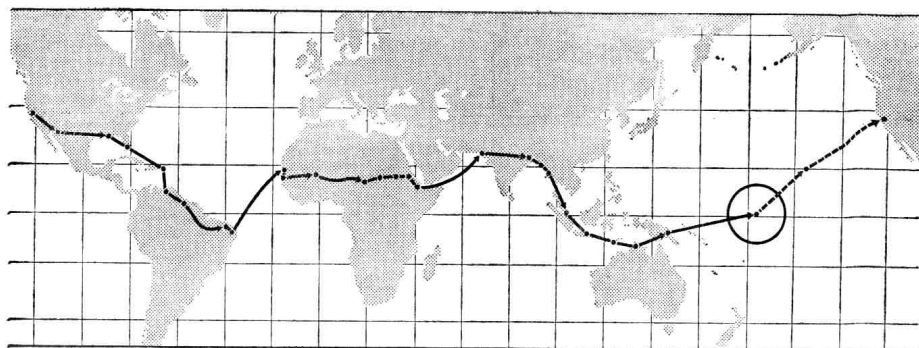
定価 1100円

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

©Fukiko Aoki 1983 Printed in Japan

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします



■ 目次 ■

第一章 遭難機浮上せず 7

第二章 女流飛行家の任務 43

第三章 レディ・リンディ 81

第四章 冒険旅行の終焉 115

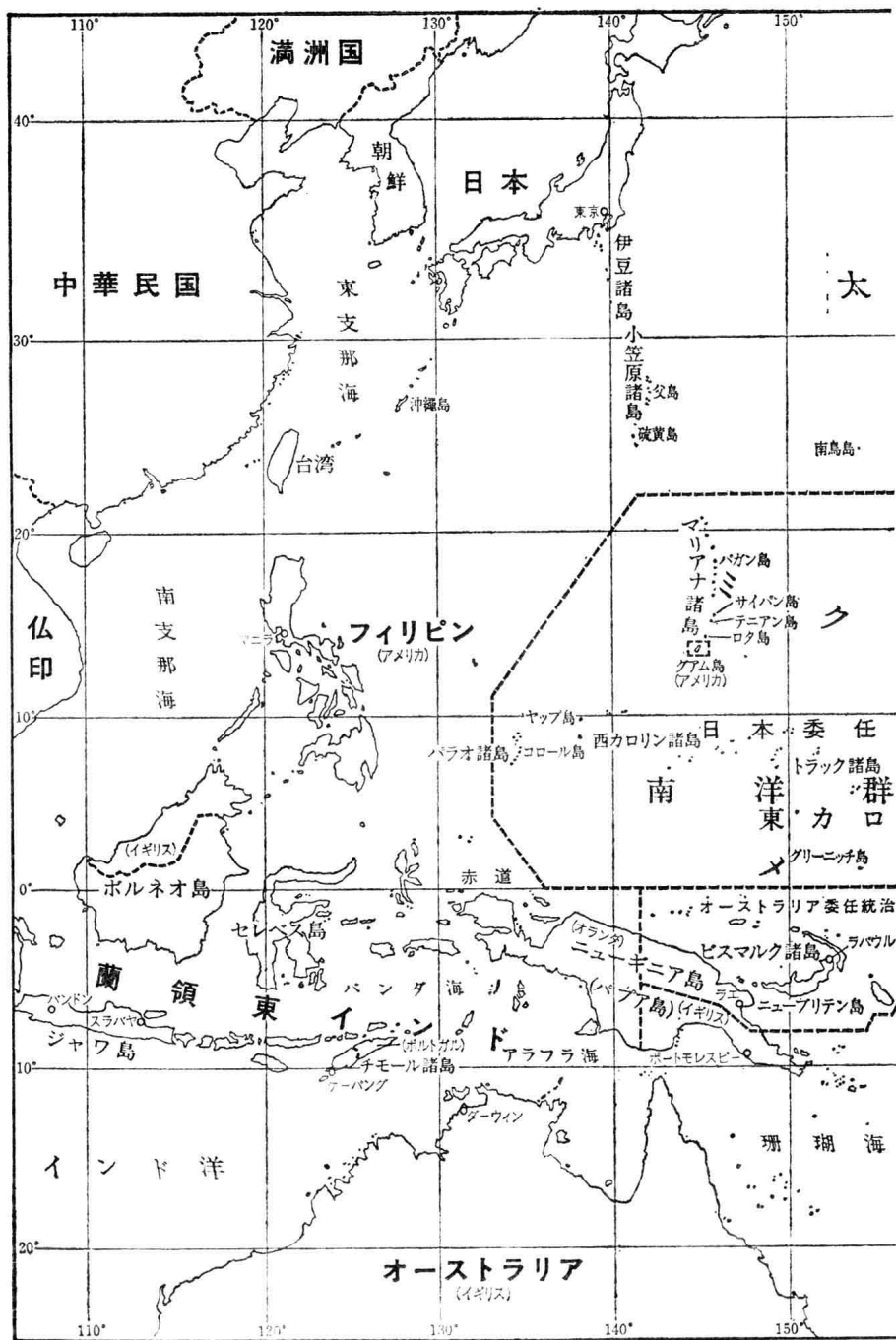
第五章 孤島の滑走路 141

第六章 サイパン島の証言者たち 181

あとがき 229

参考文献・資料 236

取材協力・資料提供者 238



〔カパー表〕 飛行訓練中のアメリカ・イヤハート。一九二六年。

〔カパー裏〕 アメリカ・イヤハート記念切手。一九六三年発行。

〔見返し前〕 世界一周飛行中のロッキード・エレクトラ。

〔見返し後〕 ハワイ・カリフォルニア間、初の太平洋横断を達成直後のアメリカ機、ロッキード・ヴェガを取り囲む歓迎の群衆

By courtesy of Mrs. Muriel Earhart Morrissey

〔扉〕 アメリカの筆跡。航空日誌より。

〔目次カット〕 世界一周の計画ルート

装幀 小島 武

アメリカを探せ

第一章

遭難機浮上せず

密林のなかに拓かれた滑走路が、ひと筋の線を引いて、まっすぐ海へ伸びていた。

最終点は三千フィート先、大きな湾に向かって、ぶつりと切れる。そこは、ソロモン海を見下ろす絶壁になっていて、南太平洋へと連なる紺青の海が、はるか空と水との境界線まで一望できた。

この島は、自然というにはあまりに奔放な生に満ちあふれていた。かつて「悪魔の島」とか「悪人島」とまで呼ばれ、怖がられた島である。熱帯のジャングルは自由自在にその手足を伸ばし、からませ、何もかも呑み込んで、吐き出していた。その間を縫うようにして大小さまざまな川がゆったりと灰色に蛇行していく。

それは、原始の世界を見るようだった。

大蝙蝠が闇を舞い、極楽鳥が赤や黄の羽を拡げ、ハマダラ蚊がマラリアを運んでいた。泥の川には巨大なワニやノコギリザメが棲み、木に登る魚が愛嬌をふりまいていた。

太陽はあくまでも熱く、この地に住む人間の肌を褐色というよりは、煎じつめたコーヒーに近

い暗色に焼いていた。男たちがその黒い肌にベニスケースだけをつけている部族もあった。ヒョウタンをくり抜いてつくったケースは、胸に届くほど細長く、蔓で胴に結ばれていたものだ。首狩り族もいたし、人食い人種と呼ばれ恐れられた食人の風習も残っていた。

石器時代の信仰や習俗がそのままに生きていた。文明の社会から見れば、置きざりにされた土地であった。

海へ伸びる滑走路は、熱帯樹林の濃淡さまじまな緑のなかで、そこだけ一本の白い線を引いていた。底知れぬジャングルのなかの滑走路は、切りとられて運ばれた一片の文明だった。コンクリート舗装もされていなかったの細長い平地ではあったが、大洋の向こうにあるはずの文明との唯一の接点だった。

あの水平線の向こう、引き込まれるような蒼い大洋のはるか彼方に、目指す大陸が待っているはずだった。

飛行士はそれまでに翔破してきた二万二千マイルを思いかえしていた。その長い長い道程は、赤道付近の点から点を飛んでは給油し、給油しては飛ぶという日々の連続であった。既に四大陸を回り、残るはあと七千マイル、目の前に広がる大洋を無事飛び超えれば、地球をぐるっと一周して、出発点にもどることになるのだ。

彼女は滑走路の端に立ち止まると、絶壁の真下から綿々と連なる蒼の拡がりを感じてみた。昨日まで垂れこめていた鉛のような雲が姿を消し、熱帯の空には白い雲が綿菓子のように転が

っていた。午前の太陽は既に高く昇り、珊瑚礁で固めた滑走路から、激しい照り返しを投げつけていた。

フォン湾から流れこむ生暖かい風が時折り椰子の葉をかすかに動かした。それも肌で感じられるものではなく、重い空気が舐めるようにこびりついてくるだけだった。

この異常なほどの湿気は、明け方まで吹き荒れていたモンスーンのもたらしたものだろう。

一九三七年七月二日、ニューギニア北東部のラエ。

アメリカ・イヤハートは航空士フレッド・ヌーナンとともにラエ飛行場を飛び発とうとしていた。ロッキード・エレクトラ機は尾翼に、NR一六〇二〇と書かれた標識を光らせて、白い滑走路のわきに繫留されていた。全金属製の機体は、熱帯の朝の日射しをまともに受けて、輝いていた。まわりの小さな木製の単発機や双発機と比べるとエレクトラは悠然とまぶしいばかりに見えた。

ここは椰子の木に囲まれた小さな陸上飛行場であった。滑走路の近くには格納庫も数棟建っていたが、それもほんのバラック小屋という程度のもので「ギニア航空会社」と書かれた表看板のベンキも、ほとんど剝げ落ちていた。

十年余り前、近くのエディ・クリークで金が発見されてから、ギニア航空はジャングルのなかの金鉱と外界とを結ぶ唯一の交通手段になっていた。小さな木製飛行機が白人技師や採掘機材を載せて、曲芸飛行しながらに密林の間を飛び回る。ちょっとした冒険飛行だった。

ゴールド・ラッシュにでも見舞われなかったら、こんな密林の僻地まで飛行機などとても飛ん

ではこなかったろう。ましてや飛行場が作られることもなかっただろう。そうした「文明」はせいぜい南のポート・モレスビー止まりで、この住民は川のほとりに杭上家屋を建てて生活し、カヌーで行き来していればすべてこと足りていたのだ。

タロ芋を主食とし、豚を飼い、川で魚を突いた。祖先の霊を崇め、呪術的儀礼や祭祀を守ってやってきた。

そういう人々には、空を飛んで金を運ぶことだけでも想像を絶することだったろう。彼らのなかには華僑の広めたビジン・イングリッシュを話すものもいた。この独特の英語によると飛行機は「バルス」とか「ビッツ」と呼ばれ、小さな飛行機は「バイ・スートン」つまり、昆虫と言われたものだ。

しかし、滑走路のわきに繫留されたそのピカピカ輝くロッキード・エレクトラは、バイ・スートンどころか、見慣れたバルスやビッツとは、何もかも桁違いだった。

うなるような轟音を響かせてその光る機体が滑り込んできた時、島民は争って滑走路へ駆け出していったものだ。驚いたのはその轟音にだけではなかった。大きな翼をひろげ雄々しく舞い降りてきた銀色の機体は、それまで見たこともない未知の物体だった。やけに直線的で角ばった箱のような形をしていた。叩いてもびくともしない金属で作られていた。なかには空から飛んできたこの飛行機を、英国から輸入される「ビスケットの罐」に似ていると思った者もいた。

コックピットを開けてパイロットが翼の上に降りた時、背の高い白人の片方が女性である

ことをみつめて、何人かが騒ぎ出した。見たところ髪も短いし着ているものも変わらないが、彼女が金髪の青い瞳をしたレディであることは明らかだった。女が空を飛んできた。そんなパイロットを見るのは、もちろん初めてだった。彼らの習慣では、女はだいたい家の外へ出るものではなかったし、女と男の仕事は、はっきりと分担されていた。

二人の飛行士はオーストラリアのポート・ダーウィンからラエまで飛んできた。そしてこの先、太平洋上の孤島ホーランド島へ向けて飛び発つことになっていた。その島は、北緯〇度四九分、東経一七六度四三分というから、文字通り赤道直下の孤島で、ラエから北東へ二五五六マイルの位置にあった。

一九三七年というこの年、南太平洋の島々は米国、日本、英国、濠洲、フランス、オランダの六国に分割されていた。米国は一八九八年の米西戦争でフィリピンとグアム島を手に入れていた。これで、ハワイ、ミッドウェイ、ウエイク、グアム、マニラに至る飛び石伝いのラインを確保したことになる。

日本は第一次世界大戦の後、旧ドイツ領南洋諸島のうち、マリアナ、カロリン、マーシャル諸島を含む広大な海域を国際連盟の委任統治領としていた。現在ミクロネシアと呼ばれている海域にはば当たるところで、赤道から北緯二二度、東経一三〇度から一七五度までに及び、大小千四百余りの島々があった。

オーストラリアは、旧ドイツ領ニューギニアを委任統治領とし、イギリスはギルバート諸島やソロモン諸島、エリス諸島などを領有していた。フランスはニューカレドニア島を、オランダはニューギニア西部のほかボルネオ、スマトラ、セレベス島などを領有していた。

ホーランド島とよばれるこの島は、二年前に米領と宣言されたばかりだった。日本の南洋委任統治領のマーシャル諸島に最も近い米国である。

ラエを発ちホーランド島へ向かうことは、日本の南洋委任統治領ぎりぎりの線上をかすめることになる。ニューブリテン島ラバウル上空から、ナウル島近辺で赤道を越え、ギルバート諸島のマキン、タラワ島近くを通過して、一八〇度の子午線を越える。

しかも二五五六マイルという航続距離は、この世界一周飛行のなかで最長距離となっていた。ロッキード・エレクトラ機はこの時代の最新鋭機で航続距離は四千マイルとされてはいたが、目指すホーランド島は、長さ二マイル、幅半マイルしかない小っぱな島だった。太平洋の荒波のなかを飛び越えて、点ほどもないこの島をみつけるのは、極めて難しい飛行となるはずだった。しかし、この世紀の飛行には合衆国政府の強い支援が準備万端整っていて、それらの数々の裏付けがあつてこそ、ようやくここまで飛んで来たものでもあった。

既に米海軍は、ホーランド島に三本の滑走路を完成させていた。さらにエレクトラ機と無線連絡をとるために、沿岸警備隊の巡視船を島へ派遣させていた。ナウル島付近には、米海軍の「オントリオ」が配備されていた。

ベテランの航空士フレッド・スーナンが、特にこの洋上飛行のため、ナビゲーターとして選ばれていた。彼が天体観測で位置を割り出し、クロノメーターとラジオ無線で島をみつけていく。

一カ月前の六月一日、マイアミの市営飛行場を離陸してから、女流パイロットとベテラン航空士のコンビは、順調に飛行を続けてきていた。東回りにコースをとり南米のベネズエラ、ブラジルを経て南大西洋を横断。アフリカ大陸を渡り、インド、ビルマ、シンガポール、ジャワ、そしてポート・ダーウィンと二十一カ所を経由して、六月三十日にラエへ無事、到着した。

ニューヨークにいるイヤハートの夫、ジョージ・プトナムは、各地で連絡を入れてきていた。ジャワ島のバンドンでは、ニューヨークからの国際電話が通じた。ラエには真珠湾の海軍を通じて無線を送り、土曜日から日曜日には帰国できるかどうかと確認している。

日曜日は七月四日にあたり、合衆国独立記念日である。この日、女流飛行家は世界一周を完了し、米国西海岸のオークランドに凱旋する予定が組まれていた。

天候は二日間、エレクトラ機に足留めをくわせた。ニューギニア北東部から南太平洋を襲ったモンスーンのおかげで二人はラエに釘づけになっていた。余すところあと二日。しかし、ホーランド島への航程では、国際日付変更線を通過する。二十四時間稼働ことにはなるが、ハワイを中継し七月四日までにオークランドへ着くには、ぎりぎりのスケジュールになってしまった。

女流飛行士は鉛色の空を見上げながら焦燥感にかられていた。すぐにも飛び発ちたいのに、飛